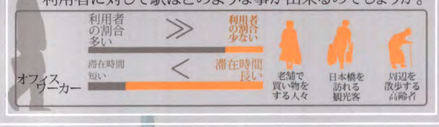
東京メトロ銀座線
商業エリア
駅デザインコンペ

呼応する律動に座る。

こおうするりつどうにすわる

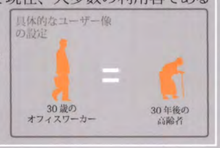
■01_現状の問題提起
「少数利用者は駅の滞在時間が長い」

現在の地下鉄の駅は大人数の人々を運ぶという機能に特化しており、それは大多数利用者である通勤客に対し施されています。しかし、その反面、駅の滞在時間が長いのは、むしろ少数の利用者です。このような滞在時間の長い少数利用者に対して駅はどのような事が出来るのでしょうか。



■02_ユーザー像の設定
「未来の高齢者と現在の高齢者」

日本橋駅周辺の再開発により高齢層から若年層にターゲットがシフトされる中で、依然として高齢者の利用が見られる事がわかりました。一方で現在、大多数の利用客である30歳前後のオフィスワーカーは、30年後には60歳前後の高齢者になります。そうした未来の高齢者に対して、また現在の3駅を利用している高齢者を対象ユーザーとして考えます。



■03_経験のデザイン
「長期的な時間軸上の経験」

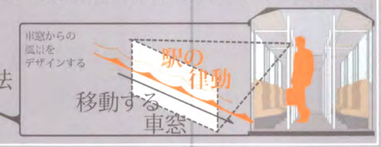
これからの30年の年月を見据えた時間軸上の経験をデザインします。時間軸を見据えたこれら二つの経験をデザインする為にこれからの30年間、恒久的にあり続ける様なデザインを施していきます。

■04_提案01ー体験性
「『座る』という行為に価値を与える」

3駅の共通するデザインの要素として、「座る」という行為に価値を与えます。この「座る」という行為の視点にたった時、見られる側にとってはその姿が情景として、見る側にとっては経験を彷彿されるものとして考えます。

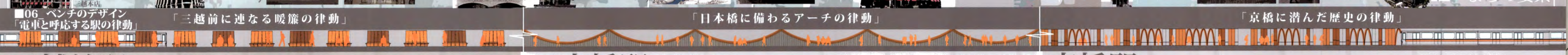
■04_提案02ーシンボル性
「その駅にしかない固有の風景を作り出す」

記号的な装飾ではなく、私たちはこれらのデザインする要素を、3駅のそれぞれの地上の要素からデザインモチーフとして取り込んでいきます。それらの一連の空間を単に駅構内で完結させるのではなく、地上の街から電車に入った後の駅の眺めまでを一連の場面として考え、一貫性のあるものとしてデザインします。



■05_デザインのモチーフ
「日本橋周辺に備わる固有のかたち」

■06_ベンチのデザイン
「電車と呼応する駅の律動」



三越前駅

三越前駅でかつての自分を振り返る経験

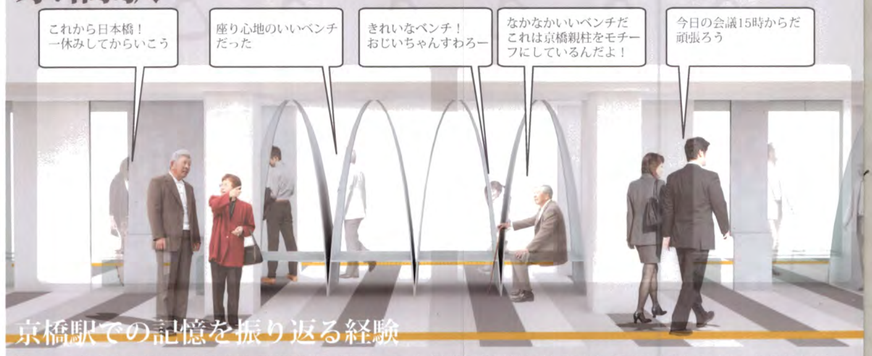
勤務していた三越を退職して30年。今は自分が買い物をする立場。銀座線に乗り三越前駅に着く頃、電車の外を見ると広告の描かれた見慣れた暖簾が見えてきた。COREDO室町ではセールが行われているらしい。電車を降り改札に向かう。天井を見上げると今度は三越のマークが描かれたルーバーが続いている。気がつくとそれに沿うように歩を進めており、その先には三越の入り口が。三越でたくさんの買い物を済ませ改札へ進もうとすると、先ほどのルーバーの裏側には銀座線のカラーが施されている。行きと同じように、いざなわれるように歩いていくと銀座線の改札がある。階段を下り、買い物に満足しながらプラットホームのベンチに腰掛けると、人ごみの中に家路につく一人の若者が目に入った。ふと三越に勤めていた頃の自分と重ね合わせるようにその若者を見つめながら電車に乗り込み、三越前駅を後にした。

日本橋駅

日本橋駅での会社員の帰宅時の経験

仕事が終わり、いつもの時間帯の電車で帰宅する。改札口頭上に広がる木ルーバーにいざなわれながら改札を通る。そういえば、今の日本橋は何代目のものだったか。木のアーチから日本橋の事についてふと考えてしまった。木の温もりは、かつての江戸時代の頃の日本橋の面影を想起させられる。そのような事を考える内に、木ルーバーはプラットホームへ続く階段の先まで続いていた。ルーバーのリズムを横目にみながら階段をおりると、目の前に広がる逆さアーチのベンチがホームの端の方まで一定のリズムを刻んでいた。ふとその場所に腰掛けている一人の老人に目が向いた。老人は私たちをどのように眺めているのだろうか。30年後の自分を想像した。働いていたこの日本橋を30年後、この駅の風景を私はどのように思うのだろうか。老人は30年後の私と同じような事を考えているのかもしれない。

京橋駅

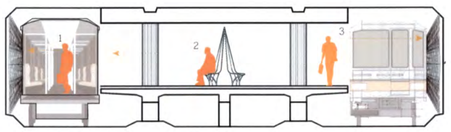


京橋駅での記憶を振り返る経験

第二の人生を歩み始めてまだ半年。現役時代に使用していた銀座線を通勤以外の目的で利用するようになったのは最近のこと。電車が京橋駅のホームに入ると2種類のベンチがリズミカルに踊りだす。ホームに降りる。ベンチと呼応したタイルが軽やかに改札まで続いている。横目にはとんがり帽子のベンチ。子供と親の和やかな会話が聞こえ微笑ましい気持ちに。改札へ向かうと壁は煉瓦調の仕上げになっておりレトロな雰囲気が漂う京橋ならではの空間。地上に続く階段に目を向けると空から眩しい光が煉瓦を照らす。地上に出て振り返るとそこにもとんがり帽子。気づいたら地上に出ている。その感じがたまらない。今、京橋を散歩している。京橋の地上にある歴史的なものを見ると地下鉄銀座線のかつての記憶がよみがえり呼応し始める。時代を超えた経験を京橋駅は与えてくれる。

日本橋 1 三越前に連なる**二つの暖簾**

■三越前駅ホーム計画

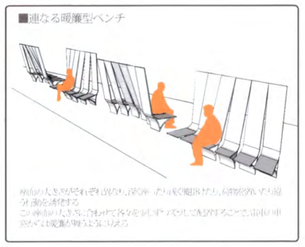


1.暖簾のルーバー
電車がホームに到着すると、三越などの広告が描かれた暖簾のようなルーバーが見えてくる。

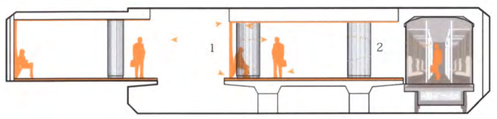
2.暖簾を想起させるベンチ
ベンチからは通勤する人を見つめ、過去の自分とを照らし合わせかつての自分を思い出す。

3.案内板としてのルーバー
電車を降りた乗客は、ルーバーの上部に描かれた案内を頼りに目的地を目指す。

■連なる暖簾型ベンチ



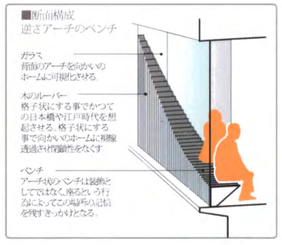
■断面計画／日本橋駅プラットホーム



1.背面の可視化
裏側になってしまっている反対側の側面にベンチのアーチによって、日本橋を想起させる景色をつくる。

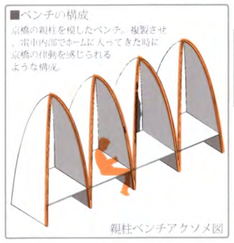
2.車窓からみる駅の律動
日本橋を想起させる逆さアーチは地上にある日本橋の情景を想起させ、駅固有の律動となる。

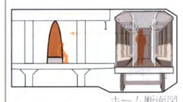
■断面構成
逆さアーチのベンチ



京橋 1 京橋を表す**二つのベンチ**

■ベンチの構成
京橋の親柱を模したベンチ。複製させ、電車内部でホームに入ってきた時に京橋の律動を感じられるような構成。



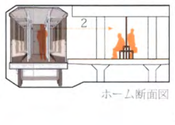


1.リズミカルなアイコン
電車がホームに入ってきた時にアーチ型のベンチがリズミカルに動くように感じる。

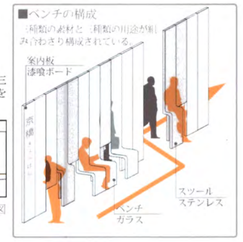
親柱ベンチ

歌舞伎定式幕ベンチ

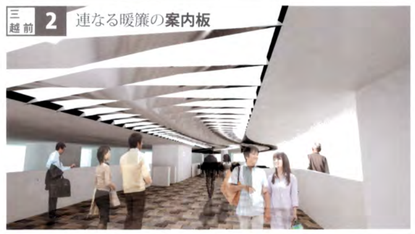
2.切り替わる視線
ガラス、ボード、ステンレスの三種類の素材のベンチで、ベンチを見る人の視線を操作する。



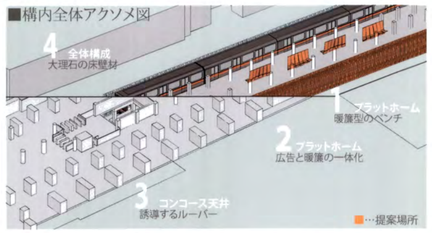
■ベンチの構成
三種類の素材と三種類の用途が組み合わさり構成されている。



三越前 2 連なる暖簾の**案内板**

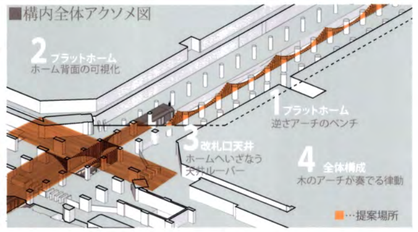


■構内全体アクソメ図



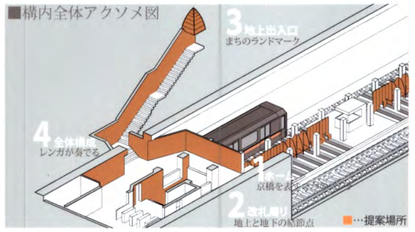
日本橋 2 ホーム背面の**可視化**

■構内全体アクソメ図



京橋 3 まちの**ランドマーク**

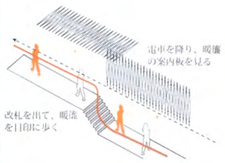
■構内全体アクソメ図



三越前 3 駅のシンボルとなる暖簾のベンチ

三越前 4 ホームから改札へ続く暖簾の律動

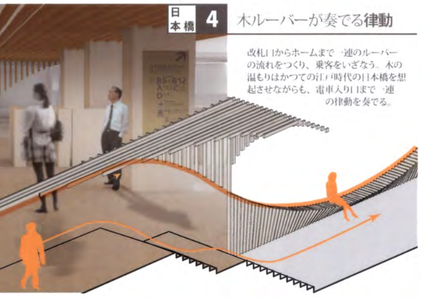
駅を降りてから改札を出て、さらに駅付近の店舗までねじれた暖簾のような帯が連続する。利用者はこの帯のリズムにいざなわれるように、またこの街の象徴である暖簾を感じながらホームから店舗まを歩いてゆく。



日本橋 3 改札口周辺ホームへいざなう**木ルーバー**

日本橋 4 木ルーバーが奏でる律動

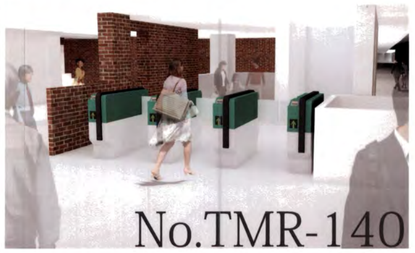
改札口からホームまで一連のルーバーの流れをつくり、乗客をいざなう。木の温もりはかつての江戸時代の日本橋を想起させながらも、電車入り口まで一連の律動を奏でる。



京橋 4 レンガが奏でる**律動**

地上からホームまでの壁の仕上げを**化粧レンガ**で統一。明治の頃レンガのまち並みにあった積み方、色からかつてのまちのリズムを表現する。

京橋 2 地上と地下の**結節点**



No.TMR-140